本格的なリアル開催の復活とアフターコロナのCES

株式会社クリエイティヴ・ヴィジョン　加藤（かとう）　浄海（きよみ）

1. はじめに

こんにちは、株式会社クリエイティヴ・ヴィジョンの加藤浄海と申します。毎年このITUジャーナルにおいてCESのレポートを担当させていただいているのでご存知の方もいらっしゃると思いますが、当社は毎年1月にラスベガスで開催される世界最大のテクノロジーショー、CESの日本の代理店を務めており、今年も日本からCESに出展される日本企業様とともに現地ラスベガスで参加してきましたのでレポートします。

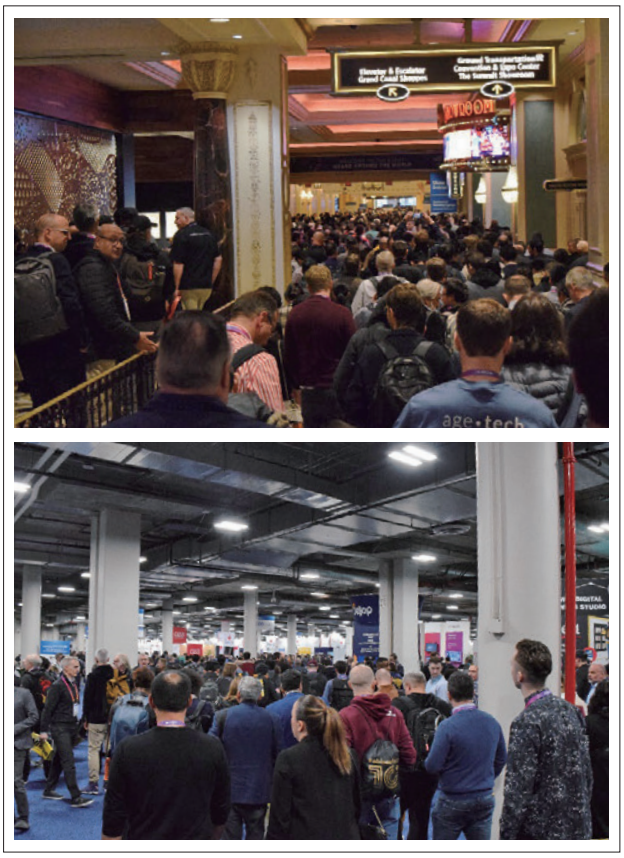
2. 本格的な展示会の復活

昨年のCES2022は2年振りのリアル開催となり、2021年末にコロナウイルスのオミクロン株の出現で展示会の来場者は約4万5000人で過去のCESの3割程度の来場者であったが、今年のCES2023では出展社数は3200社で来場者は12万人、海外からは140か国以上の参加となり、過去の6割程度が戻り、開催前からラスベガスの街も人混みにあふれ新年のラスベガスの名物風景が戻ってきた。

Fortune Global 500の企業の中から、323社が出展。60%以上の企業が出展しているイベントであることからもテクノロジー業界において世界で最も重要な展示会であることが分かる。

CES2023は完全にリアル展示が復活しており、CESの見応えの一つとなる世界的テクノロジー企業の出展も大規模な出展となった。

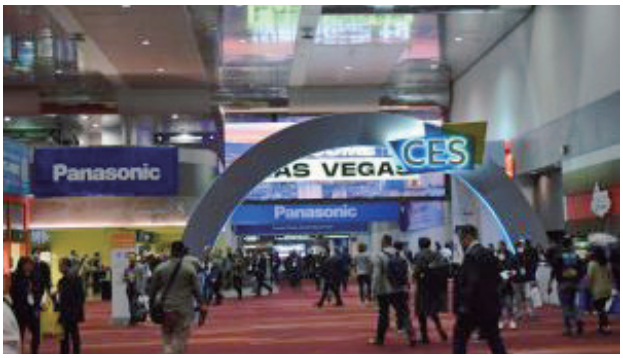
■図1. メイン会場のラスベガスコンベンションセンター



■図2. 混雑する会場

3. 各会場について

セントラルホールは元々の家電ショーの時から出展している大手家電メーカーが大規模ブースを構えて出展していて、かつては日本の家電メーカーも多く出展していたが、現在



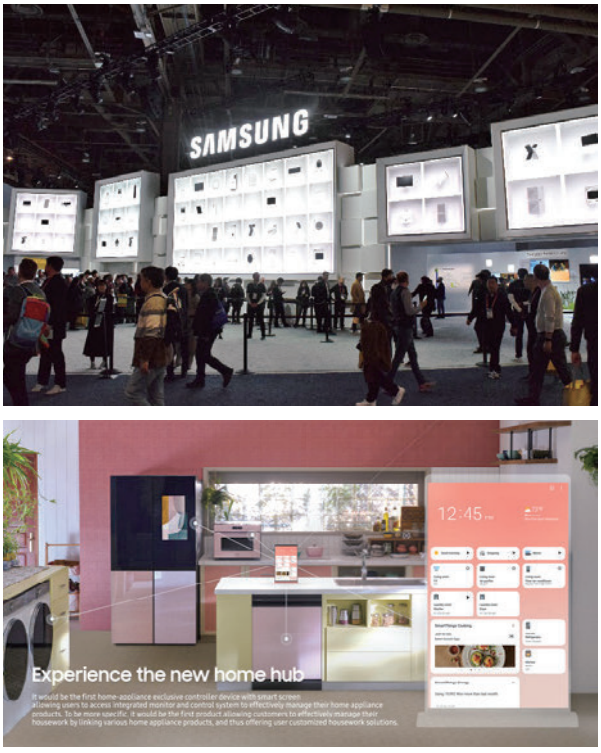
■図3. セントラルホール

は減少しており、その代わりに韓国のサムスン、LGなどが大きな存在感を示すようになった。

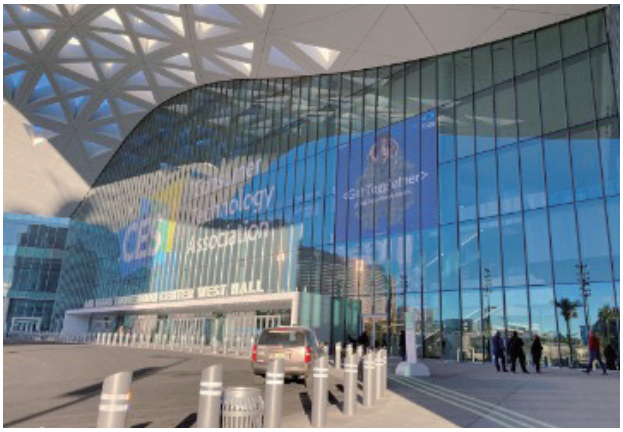
ラスベガスコンベンションセンターの中で一番新しく大きいウエストホールが、自動車関連の展示会場となり、大きな賑わいとなっていてコンセプトカーや自動運転などのソリューション展示となっていた。

その中でも注目度が高いのが、BMWの『i VISION Dee』。「Eインク」という最新のテクノロジーで、車体の色を数秒で32色に変更が可能となる技術を公開した。

ノースホールはデジタルヘルス関連が多く、COVID-19の



■図4.　サムスンブース



■図5.　ラスベガスコンベンションセンターウエストホール

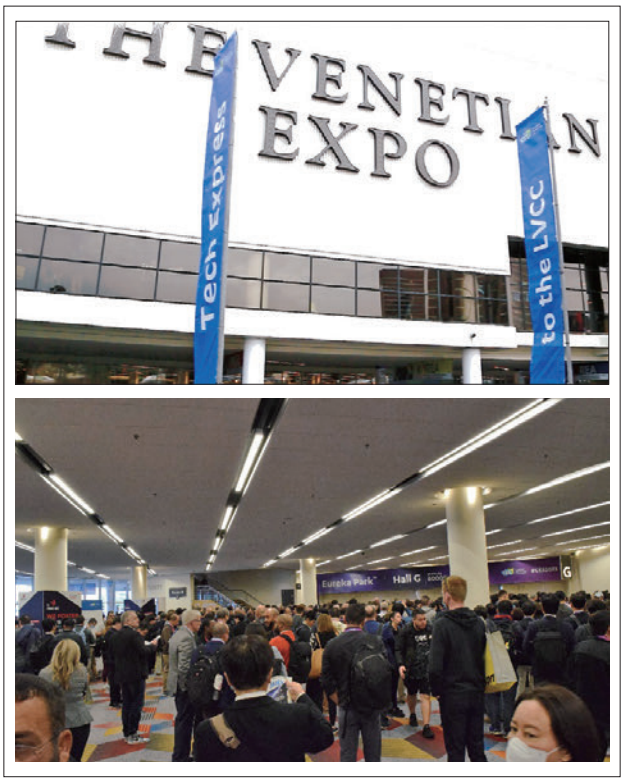
■図6.　BMW　i VISION Dee

世界的大流行以前からその流れはあったが、COVID-19という大きな時代の変化を通してヘルステック関連の注目度が大きく伸びている。昨年もCESで上手くプロモーションを行っていたアボット社は、今年も無料でPCRの検査キットを配布していたが、昨年との大きな差は来場者が無料の検査キットをあまり受け取らなくなり、コロナウイルスへの関心が大きく下がったことを表している。しかし、ヘルステック関連の企業の出展はとても来場者の関心が高く、人間の健康関連のテクノロジーは変わらず人気であった。

CESの中でも世界的に注目度が高いのが、ベネチアンエキスポ1階に場所を設けているユーレカパークで、テクノロジー関連のスタートアップ企業が世界中から集まる世界最高峰の場所となっている。

ここは各国がパビリオンを設けて出展しており、スタートアップ企業とビジネスや投資を行いたい企業や投資家が世界中から集まる世界有数の場所となっており、毎年大きな盛り上がりを見せているカテゴリーである。

このスタートアップが集まるユーレカパークにおいても韓国の勢いは強く、国を挙げて複数のパビリオンを設けて自国のスタートアップ企業をCESに送り込んでいて、韓国のテクノロジー産業のグローバル戦略がとても強く、日本は完全に負けている状態で、今後も負け続けて行く気配を感じる。



■図7. ベネチアンエキスポ

4. 日本の世界での存在感の無さ

インターネットの登場で世界中の人々と接する機会が増え、世界でビジネスをすることが当然となってきている世の中では、世界に出てビジネス感覚を養うことがとても重要で、このビジネス感覚の高さは韓国人、中国人、台湾人に我々日本人は完全に負けていると、CESを通して実感する。

CESはテクノロジーの最高峰の展示会であり、世界有数の展示会で世界中から参加者がある展示会である。その中で日本のランキングは25位。

この国際的なイベントでの自国のランキングの低さに少し驚いてしまう。

日本はかつてエレクトロニクスメーカーの大国だった。CESにおいても多くのエレクトロニクスメーカーが出展していたが、昨今はエレクトロニクスメーカーではない企業の出展が増えてきている。今年もサントリーグローバルイノベーションやエネオス、福岡市役所、旭化成など、エレクトロニクスメーカーではない企業の出展が増えてきている。これは時代の変化であるが、CESがコンシューマーエレクトロニクスショーからCESに変わったように、現在におけるCESは、より良い世界を築く未来ショーで、世界を良くするイノベーションが集まって来ている。これからも世界を良くする日本企業が

■図8. 韓国ブース

世界に出て活躍することで、多くの日本人に自信を与え、日本がかつて持っていた輝きを取り戻せると信じている。

5. CES2024に期待を寄せて

今回のCES2023は全盛期の6割ぐらいの来場者だった。コロナウイルスの影響も世界の中では残っていて出国制限などで参加できない国もあったが、会場の盛り上がりは全盛期に近い感じとなり、次のCES2024は完全復活となる気配を感じた。世界中から関係者17万人以上が集まるビジネスイベントとして、次回はコロナ前以上の盛り上がりを期待している。